

相模国府祭とは

相模国府祭は、神奈川県中郡大磯町国府本郷において、相模の六社が集う祭典で、神奈川県無形民俗文化財に指定されています。

神揃山では、相模国の成立にあたり論争の模様を儀式化した神事である座問答が行われ、逢親場（現在の馬場公園）では、国司祭や鷲の舞が奉納されます。

神揃山祭

五社の神輿が神揃山に到着すると各社定められた道より一之宮から順番に入ります。

無事な着御の奉告と国家安泰・五穀豊穡を祈願します。

餅まき（ちまき）

神揃山の祭場には力石といわれる石があり、三之宮比々多神社の青年たちが粽（ちまき）俵（だわら）を「ヨイショウ」の掛け声とともに、高く放り上げ、数回でその石の上に落ちた俵が壊れかかると二斉に群がり、中の餅を奪い合いながらも、所かまわず四方八方へ餅まき散らします。

「ちまき」とはこの動態から起った呼び名といわれています。この御神霊（みたま）授かり、福分けの餅を拾って御供（ごころ）とし、家族でいただきます。無病息災、家内安全がもたらされるといわれています。

座問答（ざもんどう）

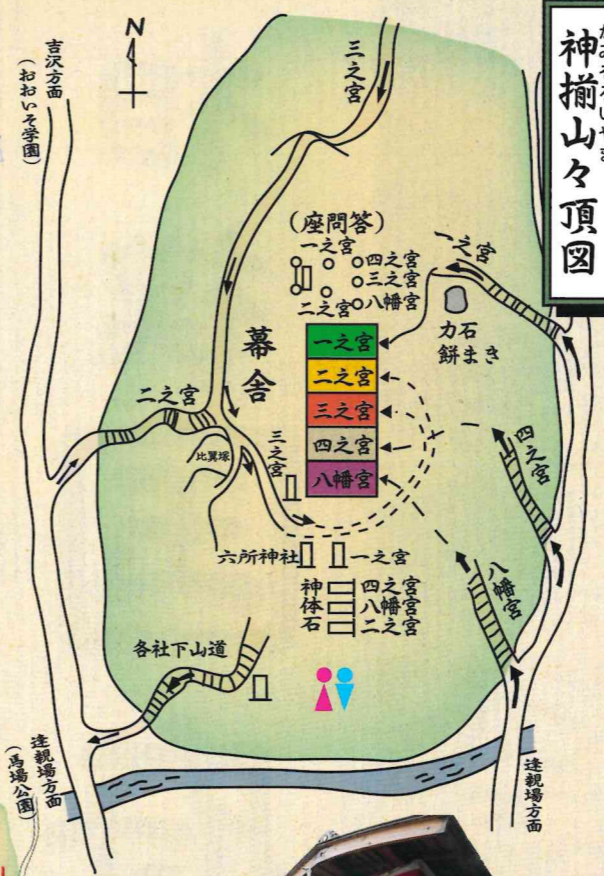
大化の改新以前、今の磯長より東に「相武（さがむ）」、西に「磯長（しなが）」という国があり、その二つの国を合併して相模国が成立しました。相模の国の最も大きな神社が寒川神社、磯長の国の最も大きな神社が川勾神社であったことから、両国の合併にあたり、どちらが一番大きな神社であるか論争が起りました。

この論争の様子が儀式化され神事となつて伝わったのが座問答です。

座問答では、虎の皮を使い神事を進めます。虎の皮を上位に進める事は当社が相模の「宮」であることを無言で表しており、次に進める事ははいやいやうちこそが、それを三回繰り返す長い長い論争であったことを表しています。

その仲裁として、比々多神社の宮司が「いずれ明年まで」という言葉で解決され、いずれ明年が1000年以上続いたことと勝・負のない神様らしい円満解決の様相です。

神揃山々頂図



神対面・国司奉幣と鷲の舞

逢親場（現在の馬場公園）で神対面の神事、国司の奉幣が行われ、総社に各社が御分霊を納めます。

国の行政としての政行が行われ、鷲の舞、浦安の舞が奉納されます。国府祭へ奉演される鷲の舞は、古くは国司や相模の豪族たちをもてなすための舞で、京都より伝えられ、国府時代の名残が現代まで伝えられています。

鷲の舞は三種の舞により構成されており、「鷲の舞」が天下泰平、「龍の舞」が五穀豊穡、「獅子の舞」が災厄消除を祈願すると伝えられています。



三之宮比々多神社の暴れ神輿

かつて三之宮比々多神社の神輿は、国府祭神揃山への道中は畑や田んぼの中も構わず直進しました。神輿行列により踏まれた畑・水田は実りが良かったと伝えられています。

相州神輿の横手についているタンヌと呼ばれる把手を引っ張り神輿を倒さんばかりに揺らします。



至二宮駅 変電所

